

(英語版)

(アラビア語版)

(目次)

見果てぬ平和 ― 中東の戦後75年 (三十五)

第一章 民族主義と社会主義のうねり (十九)

三十五 ナクバ(大災厄)で覚醒した青年将校(一一二)



これに対してアラブ側は開戦と同時に四方八方からイスラエルに攻め込んだものの、アラブ連合軍とは名ばかりで統一した指揮命令系統もなく単なる烏合の衆に過ぎなかった。個々の兵士たちは自分たちが何のため、そして誰のために戦っているのかわからな  
いまま、ただ上官の命令に従い旧式の武器でユダヤ人と交戦させられたのである。戦線の  
のいたるところでアラブ兵士は敗退した。彼らはこの戦争を「ナクバ(大災厄)」と名付  
けた。

後にエジプト大統領となるナセル少佐も戦争に従軍し負傷している。1918年生ま  
れのナセルは1939年に陸軍士官学校を卒業後スーダンに赴任、第二次大戦中にエジプト解放運動に身を投じ、第  
一次中東戦争の時は三十歳の若き少佐であった。この時代、頭脳優秀だが貧乏なため大学に進学できない家庭の子弟  
が出世する道は士官学校に限られていた。士官学校に行けば衣食住の心配は無くそれどころか給与も支給される。さ  
らに最新の技術を習得することができ、成績優秀なら外国にも留学できる。野心にあふれた若者にとってこれほど希  
望に満ちた職業は無かつたであろう。

しかし士官学校卒業後には生命を祖国に預ける厳しい戦争が待っていた。戦争に敗れたそのとき、それまで祖国の

ためと思つて戦つてきたナセルの胸に去来したのは祖国エジプトに対する幻滅だったのか。「マツチ擦るつかのまの海に霧深し 身捨つるほどの祖国はありや」と虚無感を露わにしたのは詩人の寺山修司であるが、ナセル少佐は違つていた。彼はナギブ将軍らと共に軍隊の中に反英愛国の秘密結社「自由将校団」を結成し革命の道を目指したのであつた。

(続く)

荒葉 一也

E-mail: [Arehakazuyai@gmail.com](mailto:Arehakazuyai@gmail.com)